

動機づけ・外国語不安の捉え方と学習方略 —ベトナムと中国の学習者の比較—

西谷 まり

要旨

ベトナムと中国の日本語学習者の外国語不安について、動機づけ、学習者の不安の捉え方、学習方略使用の三つの観点から比較を行った。外国語不安に有意な差はなかったが、不安の捉え方については、中国人学習者が促進的に捉え、ベトナム人学習者は阻害的に捉える傾向があった。動機づけについては「内的志向」および「外的志向」はベトナムの学習者が有意に高く、「競争志向」は中国の学習者が有意に高い。方略平均はベトナムの学習者が有意に高かった。

キーワード：日本語教育、外国語不安、不安の捉え方、動機づけ、学習方略

1 研究の背景と目的

第二言語学習においても、他教科の学習同様、学習者の認知的及び情意的特性に働きかける教師の教授活動によって、学習者の情報処理が行われ、言語的及び非言語的パフォーマンスとなって現れるというプロセスをとる。筆者は、情意的特性のなかで、「外国語不安＝外国語を学習する際にもつ不安やそれによって引き起こされる緊張」に着目して日本語学習の分野で研究を行ってきた。

先行研究では、言語不安は言語習得を阻害するというものが多くをしめる。アメリカにおける日本語学習者を対象とした研究では、不安が高い学習者は成績が低いという傾向が見られた (Aida 1994)。初級レベルの学習者にとって不安は日本語の成績を予測する変数にはならなかったが、中・上級レベルでは関係が見出され、特に「教室における不安」は最適な予測変数であった (Saito & Samimy 1996)。一方、不安と成績の間には正の関係も負の関係もあるという見方もある (Scovel 1978)。Brown (2000) は不安を *debilitative anxiety* と *facilitative anxiety*、または *harmful anxiety* と *helpful anxiety* に分類し、*facilitative anxiety* は学習者の競争心を高め、よく勉強させると述べている。また、不安そのものを促進的・阻害的と見るのではなく不安をどう捉えるかという点については、スポーツ心理学の分野で研究が行われている。マーティン&ニコス (2007) は優秀なスポーツ選手は不安をより促進的と解釈しているが、優秀でない選手は不安を抑制的に捉えていると報告している。本研究では、Scovel や Brown の見方にならない、言語不安には、学習を阻害する場合と促進する場合の両側面があると仮定する。

本研究では、同じアジアの学習者である中国とベトナムの日本語学習者をとりあげ、日本語学習における外国語不安、不安の捉え方、動機づけと学習方略の関係について明らかにすることを目的に調査を行った。筆者は 10 年以上両国で日本語教育及び日本語教師教

育に携わっており、ベトナム人学習者の外国語不安について分析を行い（西谷 2003）、e-learning を使用した言語不安操作のためのフィードバックとその効果（西谷 2006）を調べるために、中国・ベトナム人学習者を対象に実験を行った。その結果、中国とベトナムの学習者の外国語不安は、ほぼ同じ傾向を示していた。また、e-learning 教材に対する学習傾向は、中国・ベトナム人学習者ともに不安低・日本語力低群の学生は学習量が非常に少なく、不安高・日本語力高の学生は学習量が非常に多かった。

今回は、不安の比較や不安そのものの高低だけでなく、不安を促進的に捉えるか、阻害的に捉えるかという点に特に着目し、学習方略使用との関係を探った点が新しい着眼点である。

2 調査の方法

2008 年 10 月に中国武漢市にある大学の日本語学科の学生を対象に調査を行った。調査対象者は 127 名である。2 年生 45 名・3 年生 55 名・4 年生 21 名、院生 6 名で、そのうち男子学生 32 名・女子学生 95 名であった。さらに 2009 年 11 月にベトナムのホーチミン市の日本語学校でも調査を行った。対象者は 104 名、初級レベルの学習者がほとんどで、そのうち男子学生 30 名・女子学生 74 名であった。調査票は中国語とベトナム語の翻訳を使用した。動機づけについては、内的動機づけ 5 項目、外的動機づけ 5 項目（堀 1994）及び今回新たに加えた 4 項目の合計 14 項目、外国語不安については 12 項目（元田 2000）を使用した。不安の捉え方については、堀（1994）を参考に筆者らの考えた促進的な捉え方 6 項目、阻害的な捉え方 7 項目の合計 13 項目、学習方略は中山晃（2005）を参考に学習者に理解しやすいように文言を改めたり付け加えたりした合計 14 項目を使用した。

3 調査の結果

3.1 動機づけ

まず、動機 14 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果¹、フロア効果²の見られた項目はなかったので、主因子法・プロマックス回転を用いて因子分析を行った。固有値の変化は 2.92、2.29、1.75、0.95…というものであり、3 因子構造が妥当であると考えられた。十分な因子付加量を示さなかった 1 項目を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。なお、回転前の 3 因子で 13 項目の全分散を説明する割合は 52.1%であった。

第 1 因子は 7 項目で構成されており、「何でも手がけたことは最善をつくしたい」「いろいろなことを学んで自分を深めたい」など、内的な動機と考えられるので「内的志向」因

¹ 天井効果とは平均値＋標準偏差が「とりうる最高値以上」となるような、得点分布が高い方に歪んでいる場合をいう。

² 平均値－標準偏差が「とりうる最低値以下」となるような、得点分布が低い方に歪んでいる場合をフロア効果という。

子と命名した。第 2 因子は競争に関する 3 項目で構成されているので「競争志向」と命名し、第 3 因子は「失敗すると恥ずかしいので勉強や仕事に努力する」「勉強や仕事を努力するのは将来お金をもうけるためだ」といった 3 項目であり「外的志向」と命名した。

表 1 動機づけの因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3
何でも手がけたことには最善をつくしたい	<u>0.76</u>	−0.06	0.22
いろいろなことを学んで自分を深めたい	<u>0.56</u>	−0.10	0.01
むずかしいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	<u>0.54</u>	−0.02	0.01
いろいろなことを学んで社会や国の役にたちたい	<u>0.53</u>	−0.16	0.42
ものごとはほかの人よりうまくやりたい	<u>0.52</u>	0.39	0.31
いつも何か目標を持っていたい	<u>0.46</u>	0.01	0.17
勉強や仕事を努力するのはそれが好きだからだ	<u>0.37</u>	0.11	−0.03
他人と競争して勝つとうれしい	−0.10	<u>0.80</u>	−0.04
どうしても私は人より優れていたいと思う	0.17	<u>0.65</u>	0.26
競争相手に負けるのはくやしい	−0.13	<u>0.54</u>	0.35
失敗すると恥ずかしいので勉強や仕事に努力する	0.16	0.19	<u>0.61</u>
勉強や仕事を努力するのはほかの人に負けないためだ	0.14	0.13	<u>0.60</u>
勉強や仕事を努力するのは将来お金をもうけるためだ	−0.03	0.07	<u>0.52</u>
寄与率 (%)	22.14	17.40	12.52
累積寄与率 (%)	22.14	39.58	52.10

動機づけの 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値、標準偏差、 α 係数³を算出し、相関を求めた（表 2）。

表 2 動機づけの下位尺度間相関と平均値、標準偏差、 α 係数

	内的志向	競争志向	外的志向	平均値	標準偏差	α 係数
内的志向		0.05	0.15*	4.64	0.67	0.72
競争志向			0.20**	3.82	1.06	0.69
外的志向				3.86	1.00	0.59

* $p < .05$ ** $p < .01$

³ α 係数とは、内的整合性の観点から見た、テストの測定値の信頼性係数のことである。項目群が、同一の心理尺度の特性を示す程度を表すもの。項目間の相関が高く、項目数が多い程、 α 係数は高くなる。

中国とベトナムの学習者別に平均値、標準偏差を算出し、t 検定を行った (表 3)。その結果、動機づけの下位尺度 3 つともに、1%水準で有意差が見られた。「内的志向」および「外的志向」はベトナムの学習者が有意に高く、「競争志向」は中国の学習者が有意に高い。

表 3 動機づけ下位尺度に関する中国とベトナムの平均値、標準偏差及び t 検定の結果

	中国		ベトナム		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
内的志向	4.46	0.61	4.89	0.67	-4.95**
競争志向	4.28	0.81	3.24	1.07	8.10**
外的志向	3.58	0.92	4.22	0.99	-4.99**

**p<.01

「内的志向」および「外的志向」はベトナムの学習者が有意に高く、「競争志向」は中国の学習者が有意に高い。

3.2 不安の捉え方

不安の捉え方 13 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果、フロア効果の見られた項目はなかったので、主因子法・プロマックス回転を用いて因子分析を行った (表 4)。因子分析の過程で 1 項目の因子負荷量が充分でなかったので除外した。なお、回転前の 3 因子で 12 項目の全分散を説明する割合は 52.87%であった。第 1 因子は「授業で失敗しておいた方が本番では失敗せずにすむので、授業中は積極的に話す」「間違えたら先生が直してくれるのでどんどん質問することが大事だと思う」など 4 項目から構成されており、「授業でリスクをとる」因子と命名した。第 2 因子は「授業で自分より日本語が上手な人がいると、負けずにがんばろうという意欲がわく」「少し緊張している時の方がよい結果が出ることが多い」など 5 項目から構成されており、「緊張をプラスに考える」因子と命名、第 3 因子は「不安になると、勉強したことが余計に思い出せなくなる方だ」「いい成績がとれない時は、テスト前に自信がないことが多い」など 3 項目から構成されており、「不安に原因帰属」と命名した。

表 4 不安の捉え方の因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3
授業で失敗しておいた方が本番では失敗せずにすむので、授業中は積極的に話す	<u>0.79</u>	0.55	-0.01
間違えたら先生が直してくれるのでどんどん質問することが大事だと思う	<u>0.69</u>	0.43	-0.03
変なことを質問すると笑われたりしかられたりしそうで質問できない	<u>-0.52</u>	-0.02	0.25
授業で、自分より日本語が上手な人がいると緊張して話ができなくなる	<u>-0.46</u>	0.11	0.29
授業で自分より日本語が上手な人がいると、負けずにがんばろうという意欲がわく	0.39	<u>0.54</u>	-0.04
少し緊張している時の方がよい結果が出せることが多い	0.30	<u>0.53</u>	-0.32
日本語について不安があるからこそ、それを克服しようと思ってがんばる	0.07	<u>0.41</u>	0.17
日本語のテストの前に自信がないと、一生懸命勉強していい成績がとれることが多い	0.05	<u>0.36</u>	0.10
不安になると、勉強したことが余計に思い出せなくなる方だ	-0.17	0.19	<u>0.75</u>
いい成績がとれない時は、テスト前に自信がないことが多い	-0.17	0.49	<u>0.55</u>
日本語について不安があるから、日本語の勉強が進まないのだと思う	-0.32	0.29	<u>0.48</u>
緊張して失敗することが多い	-0.12	0.04	<u>0.47</u>
寄与率 (%)	22.52	19.58	10.77
累積寄与率 (%)	22.52	42.09	52.87

表 5 不安の捉え方下位尺度間相関と平均値、標準偏差、 α 係数

	リスクをとる	緊張をプラスに考える	不安に原因帰属	平均値	標準偏差	α 係数
リスクをとる		0.18*	-0.21**	4.58	0.79	0.64
緊張をプラスに考える			0.08	4.19	0.75	0.45
不安に原因帰属				3.46	0.77	0.62

* $p < .05$ ** $p < .01$

中国とベトナムの学習者別に平均値、標準偏差を算出し、t 検定を行った（表 5）。

「緊張をプラスに考える」 α 係数が低い点が気になるが、項目それぞれの内容に不整合はないので、今回はこの因子を採用する。不安の捉え方の下位尺度のうち「不安に原因帰

属」因子はベトナムの学習者が高く、1%水準で有意であり、「緊張をプラスに考える」因子は中国の学習者が高く、5%水準で有意である。「リスクをとる」因子は有意差が見られなかった。

表 6 不安の捉え方下位尺度に関する中国とベトナムの平均値、標準偏差および t 検定の結果

	中国		ベトナム		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
リスクをとる	4.54	0.76	4.64	0.83	-0.94
緊張をプラスに考える	4.29	0.75	4.07	0.73	2.21*
不安に原因帰属	3.46	0.77	3.98	1.09	-3.97**

* $p < .05$ ** $p < .01$

3.3 学習方略

学習方略 14 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果、フロア効果の見られた項目はなかったので、主因子法・プロマックス回転を用いて因子分析を行った（表 7）。因子分析の過程で 2 項目について因子負荷量が充分でなかったので除外し、最終的に 12 項目で因子分析を行った。なお、回転前の 3 因子で 12 項目の全分散を説明する割合は 60.34%であった。第 1 因子は「日本語で話ができる知り合いと会う機会を積極的に作っている」など 5 項目から構成されており、「日本語に触れる機会を作る」因子と命名した。第 2 因子は「常にいつまでにどのような目標を達成するか計画を立てている」など 5 項目から構成されており、「学習方法の工夫」因子と命名、第 3 因子は「辞書で調べる前に、すでに知っている単語から新しい単語の意味を推察する」「辞書で調べる前に、新しい単語の意味を文脈から推察する」の 2 項目から構成されており、「推測」因子と命名した。

表 7 学習方略の因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3
日本語で話す機会を増やすために、日本語で話ができる知り合いと会う機会を積極的に作っている	<u>0.84</u>	0.55	0.35
日本語をできるだけ多く使える機会を見つけようとする	<u>0.81</u>	0.58	0.40
間違いをする心配がある時も日本語を話すように自分を励ます	<u>0.71</u>	0.41	0.26
声に出しながら発音とセットで言葉を覚える	<u>0.48</u>	0.41	0.30
日本語を読む機会を増やすために、日本語の新聞や Web ページ、字幕付きの映画やドラマなどを積極的に見るようにしている	<u>0.43</u>	0.30	0.39

表 7 学習方略の因子分析（続き）

	因子 1	因子 2	因子 3
毎日または毎週ごとに、計画的に勉強時間を確保し、自分で決めた量の勉強をしている	<u>0.42</u>	0.30	0.36
自分の日本語力を向上させるために、常にいつまでにどのような目標を達成するか計画を立てている	0.46	<u>0.78</u>	0.23
他の人の勉強の仕方を聞いたり、先生に相談したりして、勉強の仕方を工夫している	0.48	<u>0.76</u>	0.28
目標と比べて、今どのぐらい日本語学習が進んでいるか記録をつけたりする	0.62	<u>0.68</u>	0.41
日本語を勉強していてわからない時日本語ができる人に助けてくれるように頼む	0.54	<u>0.56</u>	0.36
辞書で調べる前に、すでに知っている単語から新しい単語の意味を推察する	0.35	0.30	<u>0.86</u>
辞書で調べる前に、新しい単語の意味を文脈から推察する	0.35	0.29	<u>0.73</u>
寄与率 (%)	40.22	11.35	8.76
累積寄与率 (%)	40.22	51.57	60.34

表 8 学習方略下位尺度間相関と平均値、標準偏差、 α 係数

	日本語に触れる 機会	学習方法の 工夫	推 測	平均値	標準 偏差	α 係数
日本語に触れる 機会		0.64**	0.38**	4.46	0.81	0.77
学習方法の工夫			0.34**	4.17	0.83	0.78
推測				4.59	0.97	0.75

* $p < .05$ ** $p < .01$

中国とベトナムの学習者別に平均値、標準偏差を算出し、t 検定を行った（表 9）。その結果、学習方略の下位尺度のうち「日本語に触れる機会」因子、「学習方法の工夫」因子はベトナムの学習者が高く、1%水準で有意である。「推測」因子は有意差が見られなかった。方略平均もベトナムの学習者が 1%水準で有意に高い。

表9 学習方略下位尺度等に関する中国とベトナムの平均値、標準偏差およびt検定の結果

	中 国		ベトナム		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
日本語に触れる機会	4.27	0.80	4.70	0.76	-4.11**
学習方法の工夫	3.92	0.75	4.48	0.82	-5.33**
推測	4.61	0.98	4.57	0.97	0.25
方略平均	4.18	0.64	4.60	0.73	-4.59**

**p<.01

4 ベトナム人学習者と中国人学習者の比較

4.1 不安・不安の捉え方・動機づけ・学習方略使用

中国人学習者とベトナム人学習者の間に不安に関する有意差は見られないが（表10）、不安の捉え方の下位尺度のうち「不安に原因帰属」因子はベトナムの学習者が高く、1%水準で有意であり、「緊張をプラスに考える」因子は中国の学習者が高く、5%水準で有意であった。つまり、不安の捉え方がベトナム人学習者は阻害的傾向があり、中国人学習者は促進的傾向があると言えるだろう。

表10 不安に関する中国とベトナムの平均値、標準偏差およびt検定の結果

国 籍	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
中国	3.64	0.72	0.89	0.37
ベトナム	3.53	0.95		

学習方略と動機づけ・不安の捉え方との相関関係を見たのが表11である。動機づけの「内的志向」は方略平均及び「日本語に触れる機会をつくる」方略、「学習方法の工夫」方略と正の相関が非常に強い。ベトナム人学習者は「内的志向」が中国人学習者より高いので、中国人学習者より方略使用度が高いことがある程度説明できるだろう。

表11 学習方略と動機づけ・不安捉え方の相関関係

	日本語に触れる機会	学習方法の工夫	推 測	学習方略平均
内的志向	<u>0.51</u>	<u>0.59</u>	0.28	<u>0.60</u>
競争志向	-0.07	-0.12	-0.02	-0.10
外的志向	0.02	0.14	-0.12	0.06
リスクをとる	<u>0.38</u>	0.26	0.19	<u>0.35</u>
緊張プラスに	0.24	0.19	0.07	0.23
不安に原因帰属	0.06	0.26	-0.04	0.15

4.2 学習歴が同程度のベトナム人学習者と中国人学習者の比較

ベトナム人学習者と中国人学習者のこれらの相違はどこから出てくるのだろうか。両者の年齢は、中国（平均値 20.42）、ベトナム（平均値 21.59）で大差ない。しかし、学習歴を見ると、中国の 25.34 ヶ月に比べて、ベトナムは 7.91 ヶ月と短い。そこで、中国人学習者は 2 年生のみ（45 名）、ベトナム人学習者のうち 4 ヶ月以下の者を除外したところ（56 名）、両者の学習歴に有意な差がなくなったので、両者の平均値、標準偏差、t 値を比較した（表 12）。その結果、全体のデータの分析とある程度同様の傾向が見られた。

表 12 学習歴がほぼ同等の中国人・ベトナム人学習者の比較

	国 籍	平均値	標準偏差	t 値
学習歴（月）	中国	14.00	0.00	0.91
	ベトナム	12.62	10.21	
内的志向	中国	4.64	0.66	-2.08*
	ベトナム	4.94	0.74	
競争志向	中国	4.16	0.77	3.99**
	ベトナム	3.43	1.01	
外的志向	中国	3.48	0.88	-3.78**
	ベトナム	4.21	1.01	
リスクをとる	中国	4.69	0.67	0.43
	ベトナム	4.62	0.83	
緊張をプラスに	中国	4.30	0.83	1.35
	ベトナム	4.08	0.81	
不安に原因帰属	中国	3.44	0.83	-1.89†
	ベトナム	3.81	1.12	
機会を作る	中国	4.37	0.84	-1.40†
	ベトナム	4.61	0.87	
学習方法の工夫	中国	4.09	0.83	-2.01*
	ベトナム	4.43	0.87	
推測	中国	4.82	0.85	1.28
	ベトナム	4.56	1.11	
方略平均	中国	4.33	0.68	-1.40
	ベトナム	4.55	0.83	
不安平均	中国	3.56	0.81	-0.23
	ベトナム	3.60	0.90	

†p<.10 *p<.05 **p<.01

5 考察と今後の課題

本研究はベトナムと中国の日本語学習者の外国語不安と学習者の不安の捉え方、動機づけ、学習方略使用との関係を調べた。両者の外国語不安に有意な差はなかったが、不安の捉え方については、中国人学習者が促進的に捉え、ベトナム人学習者は阻害的に捉える傾向がある。動機づけについては「内的志向」および「外的志向」はベトナムの学習者が有意に高く、「競争志向」は中国の学習者が有意に高い。方略平均はベトナムの学習者が有意に高い。「日本語に触れる機会」因子、「学習方法の工夫」因子はベトナムの学習者が高く、「推測」因子は有意差が見られなかった。

今回の調査では成績との関係を考慮していないので、不安の捉え方、動機づけ、学習方略使用が日本語学習のパフォーマンスにどのような影響を与えているかを検証することができなかった。学習のパフォーマンスとの関係を検証し、学習者の属性に応じて、どのように働きかけていけば、学習のパフォーマンスを上げることができるかを検証することが今後の課題である。

参考文献

- 中山晃 (2005) 「日本人大学生の英語学習における目標志向性と学習観および学習方略の関係のモデル化とその検討」『教育心理学研究』第 53 巻第 3 号、pp.320-330
- 西谷まり・松田稔樹 (2003) 「ベトナム人日本語学習者の外国語不安」『一橋大学留学生センター紀要』第 6 号、pp.77-89
- 西谷まり・松田稔樹 (2005) 「日本語学習者の言語不安を制御し日本語能力を向上させる e-Learning の効果」『一橋大学留学生センター紀要』第 8 号、pp.29-40
- 西谷まり・松田稔樹 (2006) 「ベトナムと中国の学習者の『言語不安』に着目した e-Learning 日本語教育」『一橋大学留学生センター紀要』第 9 号、pp.27-39
- 西谷まり・松田稔樹 (2008) 「外国語不安と学習方略」『日本教育工学会研究報告集』JSET08-5、pp.221-228
- 堀洋道ほか (1994) 『心理尺度ファイル』垣内出版
- マーティン・ハガー、ニコス・ハヅィザランティス (2007) 『スポーツ社会心理学』北大路書房
- 元田静 (2000) 「日本語不安尺度の作成とその検討」『教育心理学研究』、第 48 巻第 4 号、pp.422-432
- Aida Y. (1994) Examination of Horwitz Horwitz, and Cope's Construct of Foreign Language Anxiety: The Case of Students of Japanese. *The Modern Language Journal* 1994 78 (2) pp.155-167.
- Brown H.D. (2000) *Principles of language-learning and teaching*. Longman.
- Saito Y. & Samimy K. (1996) Foreign language anxiety and language performance. *Foreign Language Annals* 29 (2) pp.239-251.

Scovel T. (1978) The effect of affect on foreign language-learning. *Language-Learning* 28
pp.129-142

(にしに まり 留学生センター准教授)